

## 《サロン 2002NPO 化記念 キックオフ月例会(2014 年 6 月) レポート》

2014年5月31日。国立競技場が長い歴史にピリオドを打ったその日、「スポーツを通してのゆたかなくらしづくり」を“志”に掲げ、20年近い活動を続けてきた『サロン 2002』は、NPO法人となる設立総会を開き、新たな歩みをはじめました。折しも世界最大のスポーツの祝祭、FIFAワールドカップ・ブラジル大会が6月12日に開幕しました。そこで、サロン 2002のNPO化記念として、サロン 2002 理事長の中塚義実さんから、ご自身のワールドカップとの関わりを交え、FIFAワールドカップの歴史を語る「キックオフ月例会」が錦糸町に生まれたすてきなサッカーバー、「フットボールサロン4-4-2」で、6月14日夜、開催されました。

今回は、この日、新たにサロン 2002の仲間に加わったばかりの、サッカー経験7年の、22歳の女子学生の視点で、中塚理事長の講演内容と、会場・参加された方々の雰囲気、感じたことを素直にレポートさせていただきます。

《 レポーター;サロン 2002 メンバー 小川有奈(法政大学国際文化学部4年)》

### 第1部 FIFA ワールドカップを語る!(歴史編)

#### 趣意

スポーツを通してのゆたかなくらしづくりを“志”に掲げ、20年近く活動してきた「サロン 2002」は5月31日にNPO法人として再スタートを切りました。その最初のイベントが今回の月例会です。

FIFA ワールドカップが地球の裏側で開かれます。サロンの会員も大勢ブラジルに出かけています。

国内組は、日本代表の初戦に合わせて錦糸町の「フットボールサロン 4-4-2」で盛り上がり考えています。

6月14日の月例会は、NPO サロン理事長の中塚が、ワールドカップをめぐる数々の思い出と日本サッカーの挑戦の歴史を、おいしいお酒をいただきながら語ります。はじめてテレビでみた1974年大会から、現地で観戦した南アフリカ大会まで、さまざまな話題が披露されることでしょう。ワールドカップはまさに“人類の祭典”なのです。ブラジルに出かけている会員とネット回線でつなぎ、現地の様子を伝えてもらうことも検討しています。

サロン会員だけでなく、多くの方にご参加いただき、ワールドカップを語る事ができればと思います。

[ 講演者:中塚義実(特定非営利活動法人サロン 2002 理事長)開催趣意より]

#### 実施概要

【日 時】2014年6月14日(土)19:10~21:50

【会 場】フットボールサロン 4-4-2 <http://4-4-2salon.jimdo.com/>

【テーマ】NPO サロン理事長がワールドカップを語る!

【演 者】中塚義実(特定非営利活動法人サロン 2002 理事長 /筑波大学附属高校教諭)

聞き手:今廣佳郎(フットボールサロン4-4-2スタッフ)

【参加者数】大人21名・子ども2名

池田知之と妻・子ども2名、今廣佳郎、梅本嗣、大河原誠二、小川有奈、荻原崇夫、金子正彦、久保田淳、小池靖、齋藤宣彰、笹原勉、佐藤大介、柴田智博、菅原恭一、鈴木弓莉、田嶋亮、中塚義実、東海林毅、二宮和穂、原陽司。

## ～熱く、自由に、また熱く、サッカーと共に過ごした15時間～

今回の記念すべきサロン 2002・KICK OFFイベントの会場は錦糸町にある会員制の【FOOTBALL SALON 4-4-2】。

サッカー好きな仲間達が「皆でサッカーについて朝まで語り合えるような場所があったらいいよね」からスタートしたというお店の来店条件は、サッカーをこよなく愛する方！。

サッカーを見る、語る、共有する。をコンセプトに美味しい食事とお酒はもちろん、定期的なトークイベントも開催されているのだそうです。ワールドカップ期間中(7月14日まで)の営業時間はなんと、19時から翌朝9時(!!)。来られるお客さんはもちろんですが、店員さんのサッカーとお店に対する熱い気持ちを感じずにはられません。ビルの地下へと下り、入口の目の前にバーカウンター。一見お洒落な隠れ家バーのように思えますがお店の奥へ少しはいるとそこには多くのサッカー専門誌がズラっとお店の両側に並んでいます。正面の大きなスクリーン…だけではなく、左右にもモニターがついており、多くの人が大迫力で試合を楽しめる。料理も美味しく、お酒も豊富。“皆でワイワイ楽しく応援！”だったサッカーバーのイメージを一変させるほど空間でのイベントでした。

参加者の方々は多種・多業種にわたり、サッカー指導者、サッカーマネジメントに関わる方、中塚先生の勤務先の高校サッカー部の卒業生、大学・大学院時代からのスポーツの同士の皆さん、さらにそのご家族、広告会社の人も私たち若い学生たちも…etc. 大学生である私自身も含め、初めての参加者も多く、会場は大賑わい！中塚さんの人望が伝わってきます。関わり方はそれぞれですが、サッカーあるいはスポーツという共通項を持ち、初対面“同士”、というよりも「初対面でも“同志”感」に満ちていました。1部終了後は、初参加の私たちも含め、いつのまにか自然と、皆で輪になり、サッカー、スポーツについて熱く語り合う至福の時間でした。

私とともに初参加で、翌日昼過ぎまで、この会場で過ごした同級生の男子大学生(佐藤)によれば、第1部終了後、第2部の翌朝10時からの日本対コートジボワール戦の応援に向け、深夜のゲームも目を凝らして観戦する者、深夜に熱く語る方々もいたとか。一度自宅に帰宅して早朝戻って来た方々も。会場はいたって自由な雰囲気。朝になると、あっという間に店は満杯に近づき、疲れなんてこれっぽっちも感じさせず、朝7時キックオフのイングランド対イタリア戦では皆、朝食をとりながら、食い入るようにモニターを見つめ、あちこちで議論がはじまっていたそうです。そしていよいよはじまった日本対コートジボワール戦。試合中は「選手の走り方が国によって異なる。」など独自の分析的な意見が出たり、ワントップについて白熱した議論にもなっていた。キーメンバーの先発起用のメリット・デメリットや攻め方のパターン検証について語り合ったりする場面も。実際に現場に長く携わってきた・いる方も多くいることから3倍も10倍も濃い試合観戦だったそうです。自分だけではない、様々な視点から見て、それぞれの試合の見方や多様な意見があることこそがサッカーの楽しみの大きな1つでもあることを再実感した1日だったそうです。

前置きはこのくらいにして、メインイベント、中塚さんの講演内容をご紹介します。

～マイナーからメジャーへ。

ある少年のサッカーとの出会い、そして日本人のサッカー感を変えていったワールドカップ～

1961 年生まれのサッカー少年はワールドカップを知らずに育っていった

1961 年生まれの大阪で育った中学生がサッカーをはじめた。

中学生になった70年代初頭はまさに野球全盛時代。サッカーなどというスポーツは、とてもマイナーでと見られた世の中。そんな時代、中塚さんのサッカーとの出会いのきっかけはお父様にあったそうだ。高知で育ち、(高校野球で有名な)土佐中学・高校のサッカー部の設立期のメンバーであり、大阪商業大学のサッカー部でご活躍されたお父様の影響で大阪府の茨木市立南中学校に入学すると、1年生からサッカーを本格的に始めた、という。

サッカーに縁があった中塚さんだが、中学入学前の時代のワールドカップの記憶はないのだそうだ。

おそらく、ワールドカップの情報自体がほとんど日本のサッカー少年の目にも触れる機会自体が皆無だったのだらう。

**\*1974 年 西ドイツ大会 ～クライフのオランダの登場と日本での録画全戦テレビ放送の開始～**

中塚さんがサッカーを始めたこの年はワールドカップ西ドイツ大会の年でもあった。

当たり前のことだが、ドイツが1990年代に入るまで、冷戦のあおりで東西二か国に分かれていた、そんな教科書でしか知らない時代の出来事だ。

まだ日本ではサッカーが成熟しておらず、もちろんメディアでの取り上げ方なども全く今とは違っていた。

この時代、中塚少年のサッカー情報収集の大きな手助けになっていたのはサッカー専門誌。サッカーの練習指導に関する記事が多く、中塚さんが愛読していたのが1966年創刊の「サッカーマガジン」や、1971年創刊(1988年廃刊)の「イレブン」。(サッカーブーム後に週刊化したサッカーマガジンが近年休刊したという話も切なそうに触れていた。)その他にも影響を受けた書籍に『おお、サッカー天国』(中条一雄著)というものがあったそうだ。

今では考えられないが、当時は、サッカー本がほぼ皆無の時代。「ワールドカップ」が、そもそも、どういものなのか全く知らなかった中学生の少年には、この本や雑誌で知る「ワールドカップ」の存在は驚きばかりであった。

ワールドカップの生中継など、日本ではもちろんない。

当時、東京12チャンネル(現テレビ東京)の「三菱ダイヤモンド・サッカー」という希少価値のサッカー試合紹介番組が日本で初めてワールドカップを全試合TV放送。画期的な出来事だったとのことだ。「ブラジル対スコットランド」の試合が、中塚さんがはじめて見たワールドカップの試合だったという。前半、後半が2週にわたり放送され、数ヶ月かけて全試合を紹介する気が遠くなるような放送だったそうだ。

(余談だが、会場の50代と想像される方々の懐かしそうな“うなづき”が続いていました。)

さて、西ドイツでのワールドカップの決勝戦は、「ベッケンバウアー」率いる西ドイツ対「クライフ」率いるオランダ。

オランダ代表は、ポジションが固定的ではない、画期的なサッカースタイルで、革命的だった。

ヨハン・ニースケンのペナルティキックなど世界最高峰のサッカーに中塚さんはとても衝撃を受けたという。

それだけではない。試合会場に溢れるフェンスの広告。緑色のキレイな芝生。テレビ画面に映る全てが中塚さんを惹きつけた。笑い話だが、ビデオすらないこの時代。アナウンサーが読み上げる選手名を「テープレコーダー(!)」に録音し、繰り返し、後で聞きながら、選手たちの名前を覚えたのだそうだ。

**\*1978 年 アルゼンチン大会 ～放映権あるNHKのスポーツニュースでも結果のみに愕然～**

高校生になった中塚さんを待っていたのは、中学時代の上意下達の“古典的サッカー部”から、キャプテン中心の民主的なサッカー部へと、部活動もプレイのスタイルも変わり、日々練習に励んでいた。高校生時代に迎えた1978年のアルゼンチン大会の放映権はNHKが持っていたそうで、中塚さんはNHKのスポーツニュースを楽しみにするが、取り上げられるのは野球やゴルフばかり。サッカーは試合結果のみ。サッカーの国民的関心の低さ故だ。

そんな中塚さんが鮮明に覚えているというのが6月末の日曜日。この日は遠征で自らサッカーを2試合。クタクタになって早々に寝て、深夜3時ごろに起きて見ようとしたが、あろうことか3つかけていた目覚まし時計を全て止めたまま朝を迎えてしまったという。仕方がないので、結果を知らないようにして夜7時からの録画放送を見ようとしていたところ、体育の時間に同級生から試合結果を知らされてしまったことだ。

あの「マラドーナ」登場の大会か、とも期待された地元アルゼンチンでの1978年大会。だが彼は若さ故に自国開催の世界カップには惜しくも出場できず。翌年(1979年)に日本で開催されたワールドユースにキャプテンとして出場。見事彼が率いるアルゼンチン代表が優勝し、MVPにも輝いた。彼の存在は中塚さんに衝撃を与え、自身のサッカーのプレイにも大きく影響を与えたのだという。

#### \*1982年 スペイン大会 ～攻撃的なブラジルに魅了される日々～

マラドーナがワールドカップデビューを飾った記念すべきこの大会。中塚さんは筑波大学の3年生。総理大臣杯の登録メンバーに選出されチームメイトとともに遠征先の宿舎で過ごしていた。当時はアルゼンチンかぶれだったという中塚さん。しかしブラジル対アルゼンチンの試合を観戦し、攻撃的なブラジル代表のサッカーに一転、夢中に。

この大会の、ある試合の特定の映像シーンを中塚さんはその後、繰り返し見ること、いや見せ続けることとなる。

2次リーグの「ブラジル対イタリア」の試合の一場面。1-2でイタリアを追いかけるブラジル代表右サイドに走り込んだトニーニョ・セリゾの動きに3人も相手ディフェンダーがつかれる。空いたゴール前のスペースでファルカンがシュート。2-2に追いついた。ボールを持たない選手の動きがこの強烈なシュートを生み出した。ベストゲームのなかのシュートとして忘れることができないと言う。

今でも中塚さんが、生徒への指導映像として、繰り返し見せるシーンなのだ。

#### \*1986年大会 メキシコ大会 ～国立の青空は、まだメキシコの空にはつながってはおらず～

1993年のドーハばかり有名だが、実は日本代表にとって、初のワールドカップ出場にあと一步に迫ったのがこの大会。1985年10月26日の国立競技場。アジア地区予選決勝、日本対韓国のホーム開催試合がそれだ。この日中塚さんは国立のスタンドにいた。そこで目にした光景は、見渡す限りの日の丸を持ったサポーター。これほど多くの日の丸を目にした記憶はそれまでの彼の人生になかったという。オールドファンにとってはレジェンドでもある、当時の10番、木村和司のフリーキックゴールもあったが、結果は応援空しく韓国が勝利。ワールドカップというものがやはり五輪よりも雲の上にある、まだまだ遠い存在である事を強く思い知らされた。

(日本人サッカーファンにとってのメキシコ大会が、一步届かなかった初出場の夢とともにあることを痛感させられるエピソード紹介でした)

余談だが、翌年の87年、ソウル五輪の予選決勝。日本は中国を相手に同じく聖地・国立で敗れてしまう。引き分けでも出場権を得られたゲームだったという。

その年、中塚氏は修士論文で「日本サッカーのプロ化」を提出。晴れて教員となった中塚さんをはじめ、周囲では「日本のサッカーもプロ化しないとだめだ！」という声が大きくなってきた時期だという。

#### \*1990年 イタリア大会 ～2002年日本開催への重要な大会～

このあたりからは、参加者に大会の試合のことを記憶している人が大多数だったこともあり、周辺の日本でのサッカー文化やメディアの行動などに関する語りや中塚さん周辺でのちょっとしたいいエピソードが中心となる。

すでに教師生活＝サッカー部指導生活、数年の中塚先生。開幕戦(アルゼンチン対カメルーン)を、教育実習(指導)の打ち上げ後、中塚さん宅で実習終了の学生などと大勢で観戦した思い出を語る。秘話として、この開幕戦を中塚家でテレビ観戦した教育実習生の中の一人に、附属高校卒業生であり、この春、ワールドカップ女子のアジア最終

予選でヨルダン女子代表を率いていた沖山雅彦監督がいた、なんて話も。(今や、中塚先生の教え子が中東の女性サッカーを指導しているのだ。)

そんな状況の中、中塚先生がはじめていた「社・心グループ」(サッカーの社会・心理の研究グループ)の研究会に、それまでの研究者だけでなく、メーカーや広告代理店やプロ選手のマネージャーなど幅広い分野の人々が集まるようになって来ていたという。1993年5月15日、日本でJリーグが開幕する前夜の光景だ。

#### **\*1994年 アメリカ大会 ~“ドーハの悲劇”と若手育成の本格スタートの時代~**

前年のワールドカップアジア最終予選。日本は“ドーハの悲劇”で本大会出場を逃した。日本中がフットボールの厳しさを知ることとなる。だが世界のサッカー界では“あの程度”は“悲劇”とは見られないことを、まだ多くのサッカーファンも知らなかった。次回開催国のフランスでさえ、予選最終戦ロスタイムで出場を逸したのもアメリカ大会だという。

この大会の前年、93年にU17世界大会が日本で開催されている。98年の中心選手に育つ中田などが出場した大会だ。我が国でも若手の育成・スタジアムマネジメントと安全・快適な環境の整備が本格的にスタートした時期でもある。世界的にみても、このアメリカ大会から2年後の96年のアトランタ五輪。U17で活躍したナイジェリア代表が優勝。この時期からアフリカサッカーが本格的に台頭したのだという。

今回の月例会の聞き役をなさっていた今廣さんも選手たちと同年代という事もあり、非常に楽しみにしていた大会であったという。この大会では、中塚さんは東京都高体連サッカー専門部の一員として警備にあたっていて、ガーナやナイジェリアのサポーターが飛び降りようとするところを体を張っていたという思い出話があったり、この大会ではスローインの代わりに“キックイン”というのがテスト実施されたが、その後どの大会でも採用されることはなかった…、という20代は決して知りえない逸話も披露された。

#### **\*1998年 フランス大会 ~日本初出場、中塚氏も現地へ。そして『サポーター新世紀』の誕生~**

次回大会の日韓共同開催が決定しており、出場権獲得の絶対的プレッシャーある日本がついに念願の初出場できたのがこの大会。中塚さん自身もツアーに申し込み、友人と一緒に現地での応援を心待ちにしていた。当時波紋をよんだチケット問題に巻き込まれそうになったが難を逃れる。スタジアムだけでなく日本代表キャンプ地などを訪れた。ワールドカップ開催には試合開催都市に限らず、キャンプ地など、様々な会場の整備の大切さをはじめて学んだという。日韓大会が近づくと誘致が話題になった「キャンプ地」について、この段階で気にかけていた関係者はまだ少なかったと記憶している、という。

さて観戦した中には、2次ラウンド進出をかけた「オランダ対メキシコ」戦もあった。ただしスタジアムではなく、サンテチエンスの公園である。結果、両者引き分けて両チームとも2次ラウンド進出が決まり、公園では両国のサポーター達が大盛り上がり。たまたまその場に居合わせた中塚さんたちも初めて現地で見るとワールドカップは選手たちだけではない。日本のテレビの前だけでは味わうことができなかった世界のサポーターの姿を知ることができたそうだ。

サロン 2002の仲間である写真家の宇都宮徹壺さんが32カ国すべてのサポーターにインタビュー、アンケートを行い、写真も掲載した『サポーター新世紀』が発案され、上梓されるのもこの大会だ。

実は、その書籍での日本人サポーターとしてインタビューされ、写真が掲載されているのも中塚さんなのだ。

#### **\*2002年 日韓大会 ~ヤカンでアンテナ！工夫で実現の放課後パブリックビューイング~**

日本が韓国と共催での初のホスト国として迎えたワールドカップである。

サロン2002の活動としては、この前年、2001年に国内で開催されたコンフェデレーションカップの運営や市民、サポーターの活動などの情報を共有するシンポジウムを新横浜で開催したという。サロン2002の活動はひとつのピークを迎えた時期だったそうだ。前回フランス大会での宇都宮氏の活動も、国内版として多くのサポーター、市民団体、グループ、NPOなどと共同し、実現を支援したという。

日本で開催されたこの大会には、多くの記憶すべきエピソードがあるそうだが、特筆すべきは、日本代表戦のグループリーグの第3戦。おりしも中塚さんの勤務先は中間試験期間の真っ最中。会場の大阪(長居)には行けないため、「物理実験室」で、試験終了後に「校内パブリックビューイング」を開催し観戦することとなったそうだ。サッカー部の生徒たちの企画である。実は教室にはテレビのアンテナが通っていなかったが、理科の先生の指導の下、ヤカンで電波を拾うという見事なアイデアと、サッカー部員たちが声をかけ集まった多くの観客(生徒たち約 200 名)とともにパブリックビューイングは成功したのだそうだ。

その後中塚さんはポルトガルの「TSTチケット」(=特定チームの試合を連続観戦できるチケット)を持っていた卒業生からチケットを譲り受け、週末を利用し韓国へ。飛行機で飛んでいる間にポルトガルの敗退が決まり、そのチケットは韓国戦のものになり、「韓国対イタリア」を現地スタジアムで観戦。

同じ日に敗退する「日本対トルコ」の仙台での試合は、サウナの休憩室で韓国のサッカー関係者たちと、ともに観戦し、日本の敗退に接したそうだ。

### \*2006年 ドイツ大会 ~ゆたかなスポーツクラブ文化との遭遇~

東西ドイツが統一してからの初のドイツ大会。もちろんこの大会も、1人の教員として世界のメガ・スポーツイベントを生徒たちに伝える義務を果たすため(会場笑)、海外研修として現地へ向かった。しかも今回は初めてサロン2002の“海外出張サロン”として、サロン2002のメンバーと現地で合流。移動中の列車に居合わせた他国のサポーターの多さに驚いたり、オーストラリア・クロアチア・ブラジルのサポーター達と共に「グループF」全チームサポーターの集合写真撮影をしたり、旅での出会いに感謝しつつ、驚きと発見の連続だったそうである。

ドイツのスポーツクラブの文化はサロン2002としても絶対に視察しておきたいテーマ、場所であった。フランクフルトのスポーツクラブをサロン2002のメンバーとともに視察したり、日本 vs ブラジルの観戦でちょうど足を運んだドルトムントのスタジアムのすぐ手前で、サポーター達の寄付により造られたスポーツクラブの建物施設を見つけた中塚氏。その施設の観察ができたこと、さらに競技場(観戦席)の最前列ではクラブのメンバーたちが身体を張り、警備を行っていること、住宅街の道路標識にはサッカーをやってよい道路である事を示す標識なども見つけた。スポーツとそこに暮らす人々が近い存在であるゆたかな生活を実感する旅だったそうである。

### \*2010年 南アフリカ大会 ~マスコミの治安懸念情報の氾濫の中で~

この年の大会も、サロン2002の仲間である徳田仁さんの専門旅行会社((株)セリエ)の主宰ツアーに申し込み現地へ向かった中塚さん。初のアフリカ大会ということもあり、日本のメディアは現地の治安などの懸念を盛んに報道していたことを記憶している方々も多いことだろう。実際に現地を見た感想としては、決してどこもかしこも、危ない所、というだけではなかったという。危ない場所はどこにでもあるし、そこには決して足を踏み入れない、その他の場所は何も変わらない。そう考えると特別日本と変わるわけではない。というのが中塚さんの感想である。

### \*2014年 ブラジル大会 ~サロン2002の新たな発展のスタートの年に~

そして今回、2014年ブラジル大会。今回は国内でどのように楽しむかを考えるという中塚さん。

4年に一度のワールドカップ。この季節が来るたびに、4年前は何をしていたかな?と振り返らずにはいられないという。ワールドカップと私。わたしたちにとってサッカーの歴史だけではなく自分たちの人生をも考える機会にもなる大きな節目である。また4年後、今回のブラジル大会もひとつの歴史として語り継がれているであろう。ワールドカップという世界の大会が【サッカー・スポーツを通じて21世紀の“ゆたかなくらしづくり”】へどのように生かし、後世にどうつなげていくか。サッカー、そしてスポーツを愛するひとりとして、是非みなで考え、語り合う機会にしてほしい。

(以上)

(追記)

## Reporter's EYE ~サッカー歴7年、22歳の視線から感じる思い~

決して興味がなかったわけではありませんでした、「一人っ子の女の子」で、サッカーを見る機会も、する機会もほとんどなかった幼少時代の私。そんな私も高校で女子サッカーに出会い、7年がたち、まだまだ知識も経験も乏しいのに、今回ご縁あってサロン 2002 のKICKOFFイベントに参加させていただきました

1992 年生まれの私にとっては物心がついた時には、もう Jリーグは存在し、サッカーは当然メジャーなスポーツ。小学校の頃、クラスの男の子の大勢がサッカークラブか野球クラブに所属していたし、スポーツブランドや飲料水のCM、テレビ番組でも、名前がわからない多くのサッカー選手が登場していたのを記憶しています。

サッカーが日常的にメディアから自然に目に入る私には、「きつと昔から、日本人の生活の近くにあったんだろうなあ…」と勝手に思いこんでいました。しかし、ほんの少し、父の世代を振り返るだけで、決して当たり前の世界でなく、積み重なってきた歴史は、多くの人の苦労と努力のおかげで、今のサッカーの立場や隆盛がある、ということにとっても驚かされました。

今回の2時間のお話だけでも、ホントに、私には驚き、発見、気づきの連続。

元々知識がほとんどないままお話をお聞きさせていただいたのでわからない単語や知識も多かったのですが、わからなくてつまらない…という事は全くなく、逆に「もっと知りたい！わかるようになりたい！」という思いがとても強かったです。

ご参考までに、同級生男子の佐藤君。彼は小学生の頃、地元の少年団でサッカーを始め、高校生まで続けていた彼によれば、サッカー、そしてワールドカップに自分の感じ方や考え方の礎を築く“小学生”という時期に触れられたのがとても大きかったと話してくれました。2002年のワールドカップ、サッカー好きだった担任の先生が試合を教室のテレビで見せてくれたり、彼の生まれ故郷の鹿島スタジアムが会場にもなったこともあり、世界のサッカーの祭典に触れ、試合のわくわく、どきどきの感動を身近に、そして強く感じる原体験があったのだ、と言います。

私は恥ずかしながら今までワールドカップ観戦というと、日本戦だけ見て、「勝った、負けた」で盛り上がり観たことしかありませんでした。今回中塚さんと聞き手の今廣さんのお話を聞いて、ただ何となく見てしまっていたサッカーの試合を今と昔で比較し、考えながら観戦したり、選手だけではなく試合を支えるサポーター、会場、その時の社会など…もっと広い視野で考えて観る事ができるようになりたいと感じました。

私にとって、ワールドカップも、(そして五輪も)とても不思議な、大きな存在に思えてきました。

もともとサッカーに精通している人も、そうでない人も、学生も社会人も、普段スポーツ番組なんて全く見ない 86 歳になる私の祖父でさえ、ワールドカップの日本の結果に関心を持ち、知っている。

見ず知らずの人々が一緒に悔しがったり、喜んだり…街が人でごったがえすほど日本、そして世界がひとつになって盛り上がるこの大きな大会。今日の私がそうだったように新しい知識と出会うことで見えてくる新しい世界。

今回このような素晴らしいご縁をいただいたことを機に、実際にプレーに関わる(また関わっていた)人だけじゃない、観る人がいて、その環境を支える人がいて、その全員が感動や勇気や笑顔を、性別も年齢も言葉も越えて共有しあえる世界—そんな“ゆたかなくらしづくり”をスポーツを通じ実現するため是非これから皆さんと一緒に考えていきたいと強く感じました。

## 【参加者からのコメント】

### ■大河原誠二

とにかく勉強になりました。そして、欲が出てきました。過去の大会での「ルールの変遷」「主要国の戦術と戦績」を見てみたくなりました。既存の資料をご存知でしたら、ご教授ください。

### ■小池靖

過去のW杯を振り返りながら日本戦を迎えるという贅沢な時間を過ごすことができました。初対面の方々からもいろいろな刺激を頂きました。サッカーを通じた豊かな集い、新生サロンの門出を飾る良い企画になったのではないのでしょうか。みなさま夜遅くまで、あるあいは、朝早くまでお疲れ様でした。

### ■東海林毅

先日のイベント、とても楽しませていただきました。

私のワールドカップは82年からですが、確か、NHKが全試合放送したこともあり、映像が鮮明によみがえってきます。とにかく当時世界のサッカーをあれだけ堪能する機会などなかったわけですから、未開の脳みそに深く吸収されのだと思います。今回参加の皆さまにもそれぞれのワールドカップが刻まれているのでしょね。

翌日は5時起床で熊谷(立正大学)に戻り、イングランドVSイタリア、日本戦をみて東京都大学リーグ(アウェイ亜細亜大学戦)に臨みました。応援するイングランド、日本は敗れたものの、わが立正大学が勝利することで寝不足と二日酔いからくる疲労は幾分軽減されました。

今回のワールドカップ、近年になく面白いように感じていますが如何でしょうか。

## 【イベント後の話―「まちこうバー」でのひととき by 中塚義実】

6月14日(土)は好き放題語らせてもらった後、フットボールサロン4-4-2で、世代と職種を越えたいろんな方々でワイワイ盛り上がりました。終電が気になり出したところに申締めとなり、私は菅原さん(大学の先輩)、二宮さん(菅原さんの同僚)とともに錦糸町駅前「楽天地」にて天然温泉とサウナを楽しみ、仮眠し、ふたたび早朝、フットボールサロン4-4-2に戻ってきました。何名かの方はそこで夜を明かした模様で、私たちが戻ってきたころにはまだソファで仮眠中でした。

7時からのイタリアvsイングランドはおもしろいゲームでした。10時からの日本vsコートジボワールは青ユニフォームの方々が続々と集まってきます(私ももちろん青ユニです)。弘前から参加の籠信義さんはじめ、懐かしい方も大勢います。そして皆で日本の勝利を願っていました…。しかし…。せつかくの盛り上がりは大きな落胆に変わってしまいました…。

同時時間帯、両国のとある「町工場」では、地域の人々が観戦できるよう改装し、日本vsコートジボワールを応援しようと地元の人々が集まっていました。仕掛け人はサロン2002会員の中村敬さんと佐藤いちろうさん。錦糸町から歩いてそう遠くないところです。試合終了後、フットボールサロン4-4-2から両国へ、約10名のサロン関係者が流れていきました。

中村さんの町工場を改造した「まちこうバー」はとても素敵な空間でした。工場前に停めた自転車をこぐとかき氷ができあがります。隣の路地に停めた車は佐藤いちろうさんの「靴朗堂本店」出張所となり、近所の子どもたちがガムテープでサッカーシューズをつくっています。バーの中には昔ながらのちゃぶ台があり、その奥ではジャズや津軽三味線の生演奏もあります。下町風情あふれる「まちこうバー」は一日中、いろんな人が出入りする空間でした。ゆったりと流れる時間を楽しみながら、飲み、語り、過ごす時間はまさに“ゆたかなくらし”を感じさせるものでした。

最後まで残っていたのは中村さん、佐藤さん、それと錦糸町から流れてきた金子正彦さん、そしてフットサルのイベント(指導されているフウガ墨田のゲーム)後に駆け付けた原陽司さんだったでしょうか。最後の方はいつものように、酔っぱらってあまり覚えていませんが、安藤裕一さんや田中俊也さんも遅くまでいたように思います。

「まちこうバー」のひとときは、2014年大会の思い出の一つとして残っていくことでしょう。